

アジアの楽器を作って演奏しよう

～竹を使った楽器の製作と演奏～

光田 龍太郎

1. はじめに

総合的な学習を音楽科として、どのように進めていくかを考えた場合、まず、教科としての音楽の授業の持つ問題点と課題を整理することによって、その方向性が見えてくると思われる。すなわち、生徒を取り巻く音楽環境は、メディアの発達などにより大きく変化しているが、さまざまな音楽情報の洪水の中で、自分と音楽との関係について立ち止まってじっくりと考える態度を養うことが必要である。次に、音楽の授業では表現ということが欠かせないが、それがともすると教師主導になりやすく、生徒は表現をしているのではなく表現させられている実態がある。つまり、コミュニケーションに裏付けされた自己表現活動がもっと重視されなければならない。さらに、国際化社会にあって、学校の音楽の授業が国際理解や異文化理解にどのように貢献しているかということも、今日的な課題である。これらの問題点や課題を考慮しつつ、総合的な学習の特質を活かせるような音楽科としての取り組みを心がけた。

2. テーマ設定とねらいについて

最初のオリエンテーションで、この1年どのように授業を進めるかについて話した。つまり、総合的な学習の意義である、「課題を探究し、表現する学習」、「覚える学習ではなく、自ら学ぶ学習」、「体験的な学習」を生徒と教師が一体となって作っていくような授業にして行きたいことを述べ、まずテーマを設定することから始めた。

テーマを考える要素としては、

- 1) 自分が現在興味を持っていることで、もっと深く知りたいと思っていること。
- 2) グループで何かを一緒に調べたり、作り上げたりしたいと思っていること。
- 3) 何かを練習して、みんなの前で発表したりすること。などを挙げ、生徒達に取り上げてみたいテーマを考えさせた。また、教師の側からも、今まで音楽の課題学習やLIFEで扱ったテーマや、考えられるテーマなどを参考として示した。その結果、取り上げてみたいテーマとして主に次のようなものが生徒から出された。

- ・楽器を作って演奏する。
- ・CMで使われている曲を分析（演奏）する。
- ・ヒット曲について調べる。
- ・効果音を作る。
- ・アレンジして演奏する。
- ・オーケストラ（ミュージカル）にチャレンジする。
- ・演奏したことのない楽器を演奏する。
- ・（音楽、洋楽、楽器、歌手、歌詞の意味、作曲家）などについて調べる。
- ・曲を作って演奏する。
- ・歌が上手になる秘訣を探る。

そして、1年間を2つに分け、前期は全員で一つのテーマに取り組み、後期はグループごとにテーマを決めて取り組むこと、前期のテーマは希望が最も多かった、「楽器を作って演奏する」にすることなどを決めた。

楽器作りは、これまでも中学校の音楽の課題学習や選択授業でも取り上げたことがあり、竹や塩化ビニールパイプを素材とした笛や尺八などを作ってきた。そのねらいとしては、主に楽器の音の出る仕組みや音階のつくりを体験的に知るというものであったが、今回はそれをさらに発展させ、アジアで多く用いられている竹の楽器に焦点をあて、竹を素材とした楽器を作りながら、竹の持つすばらしい汎用性に気づかせる。そして、鑑賞とも関連させ、アジアの民族楽器や民族音楽に親しむというねらいを設定した。さらに、楽器を作ったのちにそれを演奏し、自分たちで曲を作り、グループによるアンサンブルの創作にまで発展させることを目標とした。

3. 前期テーマの指導計画（全15時間）

- | | |
|----------|---|
| 第1時 | オリエンテーション、テーマ設定 |
| 第2時 | グループ作り、楽器製作の希望調査、口笛（コウディ）の製作 |
| 第3時～9時 | 楽器製作（並行してVTR、CD、LDによるアジアの民族楽器の紹介や民族音楽の鑑賞） |
| 第10時～14時 | 楽器演奏の練習、およびアンサンブル演奏譜の作成（並行してVTRによる竹楽器アンサンブルの鑑賞） |

4. 楽器製作の準備について

楽器の素材としての竹は、比較的手に入りやすいものとして、「真竹」、「篠竹」、「孟宗竹」などがある。学校の敷地内にある竹林の竹を切ったり、知り合いを通じて調達したものを1年前から乾燥させて使用した。

次に道具類であるが、製作に必要な以下のものを用意した。

- ・小刀 ・のこぎり ・なた ・きり
- ・電動ドリル ・電動ジグソー ・サンドペーパー
- ・棒やすり ・木工用ボンド ・瞬間接着剤
- ・メジャー など。

作る手順は、最初に5～6人のグループを作らせ、その中で自由に作りたい楽器を決めさせた。沢山の、竹で作る楽器の例を載せたプリントを配布し、また、教師が作った楽器を提示したりして、その中からグループで1つの楽器を共同で作ってもよいし、各々が別々の楽器を作ってもよいことにしたが、別々の楽器を作る場合もグループで協力して活動することを条件とした。

そして楽器作りに取りかかる前に、全員で「口笛（コウティ）」という中国の民族楽器の笛を作った。この笛は直径約1.5cm、長さ6～7cmの竹筒の中央に吹き口の穴と、音程を変えるための小さい2つの穴を開け、筒の両端を親指で塞いで吹くと、文字通り鋭い口笛のような音の出る楽器である。作り方が簡単で、小刀を使う練習になったり、笛の系統の楽器の音を出すための練習にもなるので、楽器作りの準備段階として最適である。

5. 楽器の製作

生徒に示した楽器の例は、アジア各地で使われている民族楽器を中心としたが、アンサンブルで演奏することも考えて範囲を広げ、アフリカや中南米の、竹で代用して作ることが可能な楽器も取り入れた。

その結果、生徒が製作に選んだ楽器は

- ①チャルン（竹で作った木琴） ②ケーナ
- ③ギロ ④鳥笛（音階の出るもの）
- ⑤篠笛 ⑥尺八 ⑦親指ピアノ
- ⑧オカリナ ⑨スリットドラム

などで、①はグループで1つのものを、他はグループの中でそれぞれが1つずつのものを作った。

製作方法は詳しく書いたものを各グループに渡して、それに従って作らせた。電動ドリルや電動ジグソーの操作は危険が伴うため教師が行い、また、ケーナや尺八などの吹き口は形を整えるのが難しく、その形状が著しく音に影響するため、実際に作った見本をいくつか用意して参考にさせたり、うまくできない場合は教師が手伝っ

たりしたが、生徒はなかなか思うように音が出せず、苦労していたようである。

楽器は一応、製作方法に従って作ることを基本とさせたが、それにとらわれず自由な発想でオリジナルな楽器を作ってもよいことにした。グループによっては、全く新しい発想でユニークな楽器を作ったところもあった。

また、どの楽器もなんとか音は出せるようになって、きちんとした音程や音階を作っていくのが難しく、特にチャルン（竹の木琴）を作ったグループは、単純に竹の長さだけでは音程が決まらず、厚さや乾燥の度合いなども影響するため、ピアノで音を確かめながら竹を削ったりして調整していた。ギロを作った生徒も、よりよい音を出すために、溝の深さを変えたり、ばちの形状を工夫したりしていた。

このように一見簡単そうな楽器でも、楽器として機能させるためには、いろいろな要素を勘案し、自分で考え、工夫して作らねばならない。それを実際に身をもって体験することは、生徒達にとって貴重な経験であるように思える。



6. 楽器演奏の練習と演奏譜の作成

楽器が完成したグループから演奏の練習に取りかかったが、アンサンブルをするときに、生徒達が作った楽器だけでは種類が少ないので、教師が作った楽器や音楽料の備品の楽器も加えて使用した。また、その頃夏休みに入ったため、休み中の課題として各自でアンサンブルをするための演奏譜を考えさせ、休み明けに持ち寄った演奏譜をグループで検討して一つにまとめさせた。演奏譜は曲名、どういうイメージを意図しているか、どの楽器をどのように使うかなどを書かせ、演奏時間は3～5分、楽譜の書き方は例を参考にさせたが、演奏者が分かれば音符でも言葉でも、どんな形式でもよいことにした。そして、イメージに従って練習を重ねる中で、グループごとに教師がアドバイスをしたり、改良を加えたりしながら演奏譜を仕上げていった。

演奏譜の書き方については自由な発想でユニークなもの期待したが、生徒は慣れていないせいか教師の示し

た例に近いものが多く、イメージを楽譜に書き表すことに苦勞していたようである。しかし、どのグループも話し合いを重ね、意見を出し合っ、全員が協力しながら曲を作り上げていく姿勢が見られた。また、グループに

よっては、即興的な表現を取り入れた演奏を行っているところもあった。

竹楽器演奏譜 最終ヴァージョン

グループ名 [あそび with children] (グループリーダー名: 藤田 亜穂子)

曲名 「ハワイ」

コンセプト (どういテーマ、イメージを意図した曲か、など)

楽園をイメージ

使用楽器と演奏者名

竹琴、チャリン、うなり木、バリコピン、ギロ、ゴビコタン、スリットドラム、レイスタック、指ピコ、タバリン
(藤田)(中川)(前田)(吉村)(吉村)(山本)(ゴビコ)(前田)(ゴビコ)(藤田)

竹楽器演奏譜

7. 発表

時間不足のところもあったが、6つのグループ全ての最終版の演奏譜が完成し、練習も一通りすんだところで発表会を行った。各グループの曲名とそのイメージとしたところは次の通りである。

- ① 「ロバの行進」 ロバがのんびりと行進している様子
- ② 「モンゴルの草原～スーホ～」 モンゴルの草原をイメージ
- ③ 「竹のカエルの歌」 大雨が降った後、カエルたちがたくさん出てくる様子
- ④ 「ハワイ」 楽園をイメージ
- ⑤ 「Ride on Time」 ゴジラの出現をイメージ
- ⑥ 「Remove Clock」 犬が猫を追い回す感じ

本番で音が出なかったり、リズムがずれてアンサンブルが乱れたりすることもあったが、どのグループもそれぞれ個性にあふれ、工夫を凝らしている様子を感じた。そして、自分たちが演奏を楽しみ、同時に他のグループの演奏に興味を持って鑑賞していたように思う。

8. 学習を終えて

発表会の翌週、自己評価を兼ねた調査を行った。まず、楽器の製作に関しては大半の生徒が「楽しかった」、「まあまあ楽しかった」と答えているが、楽器製作の難易度では「易しかった」7%、「普通」31%に対し、「難しかった」が62%、そして完成度では「上手にできた」27%、「普通」46%、「うまくできなかった」27%という数字は、教師が思っていたよりも生徒達は楽器の製作に難儀をしていたことが伺われた。楽器の製作が「楽しかった」、「まあまあ楽しかった」という理由としては

- ・みんなでできた
 - ・自由に作れてよかった
 - ・竹を切ったり穴を開けたりするのが楽しかった
 - ・なかなか出ない音が出ると嬉しかった
 - ・自分が実際に作ってみて難しさが分かった
- などが挙げられた。「どういうところが難しかったか」という質問では、
- ・吹き口と指穴を作る

- ・吹き口を作るのが難しく、直そうとしたらよけい音が出なくなった
- ・音（音階）を合わせるのがうまくいかない
- ・音が出るようになるまで時間がかかった

といった記述が多かったが、これらはケーナを製作した生徒の答えがほとんどで、この楽器は見た目は簡単そうだが、意外と作るのは難しく、さらに演奏も難しいので、限られた時間の中で製作や演奏に使うには少々不向きな楽器であると感じた。

次に、楽器の演奏（アンサンブル）に関しては、「楽しかった」、「まあまあ楽しかった」が合わせて80%で、その理由としては

- ・みんなで一つのことを成し遂げた
- ・一緒にしてみんなと仲良くなれた
- ・作った曲を演奏できた
- ・自由な発想で自由に演奏できた
- ・他のグループの発表が聞けた

などが挙げられ、残りの「あまり楽しくなかった」、「楽しくなかった」の理由としては

- ・うまくまとまらず、合わなかった
- ・いい音が出せなかった
- ・中途半端だった

などが挙げられた。

これらの結果から、生徒の自由裁量の幅を大きく持たせたことや、生徒同士が互いに協力し合って物事を成し遂げたことによって、教師主導の学習形態よりも生徒達は意欲や能力を発揮できたことが感じられた。一方、難しい楽器の製作や、慣れないアンサンブルの練習方法等については、教師による細かいケアがもっと必要であることを感じた。

次に今回の学習を「意欲的に取り組むことができたか」、「皆と協力して取り組むことができたか」という設問にはほとんどの生徒が意欲的に、そして協力して取り組んだと答えていた。しかし、「今回の学習を通じて民族楽器や民族音楽に対する興味・関心が高まったか」という設問では、「高まった」14%、「少し高まった」55%、「あまり変わらなかった」31%と、教師の予測より興味・関心の度合いは下回っており、教材の内容や提示方法に課題を残した。VTR、CD、LDによる民族楽器や民族音楽の紹介は短時間ずつ、楽器製作や演奏の合間合間に行ったが、集中させるためにはまとめて鑑賞したほうがよいように思われる。

9. おわりに

ものが溢れ、ものに囲まれて暮らしている今の生徒達は、昔にくらべて自分の手でなにかを作るという機会が

少なくなっているように思われる。まして、楽器に関しては製品として買うのが当たり前という意識があり、自分で作れるものだという考えにはなかなか及ばないのではないだろうか。しかし、生徒の感想に「竹でこんなにいろいろな楽器ができたのに驚いた」とあるように、竹という素材を用いることによって意外と簡単にさまざまな楽器を作ることが可能になる。その竹を最も上手に利用し、応用しているのがアジア、特に東南アジア諸国の人々である。楽器のみならず、食、住といった生活や文化にも、竹は密接に関わり合っている。また、竹は成長が早いので、竹炭にしたり、パルプへの応用や建築資材としての木材の代用など、森林破壊を防ぐための手だてとしても大きく注目を集めている。このように楽器から発展させて生活や文化、環境などについて広く思いをめぐらすことも、生徒達が「生きる力」をつけていくことに繋がるのではないだろうか。